

文人畫選

第一輯第一冊

特280-13



#280

13

1冊1-7, 2輯1

(4冊缺)

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 50 1 2 3 4 5

始



此書は、久く萎靡衰頹せる我が國の南宗文人畫を振興せしむが爲に、近年始めて多く支那より流傳して、猶未だ世に知られざる名畫を影寫輯集し、又機を得て、彼の土に在る所の寶繪を採訪し、之を縮印して、以て作者の參考に供し、且賞鑒家の眼識を高めむとて、月次刊行するものなり。

此書題して文人畫選と云ひ、主として支那の南宗文人畫に屬するものを收載すと雖も、間、北宗院體、及浙派等の佳なるものを取り、花鳥は徐氏體を主とすと雖も、間、亦黃氏體、勾花點葉體、及寫意派等の佳なるものを取り、又人物畫の雅趣に富めるものをも掲ぐべく、且少しく日本南畫の優秀なるものを附載すべし。其支那畫の、明清の作最も多きを占むべきは、年代の近きに因る遺品自然の數にして、元代の畫は、固より多きを致すこと能はず。宋畫の逾、少きは、復止むこと得ざるなり。

此書載する所、勉めて近年刊出の書に上れるものを避くと雖も、支那印行の畫本に出でたる圖にして、今原本我が國に在るか、又は彼の土に於いて、親しく影寫することを得るものは、則ち敢て之を避けず。

此書載する所の畫は、大抵別に皆其款識圖章を實大に影寫し、集めて之を卷末の數紙を掲げ、以て鑒識の資に供す。

作者の小傳、及作品の傳來等に就いて語るべき事は、之を集めて每冊卷首に記載す。但小傳は、初出の冊の外、再たび之を記さず。我が國の畫家に至りては、大抵世の知れる所なるが故に、多くは傳記を省略し、只所載の畫

に就いて、特に擧ぐべき事を記すに止む。

一 元王蒙松谿草堂圖

紙本淺絳 高二尺二寸五厘 闊一尺

東京 山本二峰君藏

王蒙、字は叔明。一に叔銘に作る。黃鶴山樵と號す。湖州の人にして、趙子昂の甥なり。強記力學。詩文書畫を兼ね善くす。その山水、初め子昂の風韻中より得來り、後唐宋の名家に汎濫し、王摩詰、及董源、巨然を以て宗と爲す。故に縱逸多姿にして、叔父の規格外に出て、終に渴染解索の皴法を以て、別に一家を成し、夙に黃子久、倪雲林、吳仲圭と共に、四大家と稱せらる。然れども、子久は猶その先輩と見え、叔明極めて之を敬し、時にその教を請へりと云ふ。元末亂を避けて黃鶴山に隱れ、明初、泰安の知州廳事と爲り、洪武十八年卒す。明史に本傳あり。茲に出す所の圖は、其遺作中の一名品にして、至正十年畫く所。一家の特趣既に成り、前に古人を絶し、後に典刑を垂れて、百代に獨歩するを見る。沈石田七絶を贊し、乾隆帝は五絶を題して、九璽を印せり。其寶重せられたること、言ふを待たず。亦以て斯種の至寶の、近年清朝の御府より出て、日東に流傳せるもの少からざることを知るに足れり。

二 倪瓚小山疎林圖

紙本水墨 高九寸七分 闊一尺六寸五分

東京 副島延一君藏

倪瓚字は元鎮。著して東海瓚、或は瓚瓚と曰ひ、姓名を變じて癸元朗と曰ひ、又元映と曰ひ、幻霞生と曰ふ。別號五あり。荆蠻民、淨名居士、朱陽館主、蕭閑仙卿、雲林子是なり。明初召さるれども固辭して起たず。人稱して無錫の高士と云ふ。性狷介にて潔を好む。行も亦然り。頗る米海岳に類す。財を輕じ、學を好み、嘗て清閨閣を築きて、古書畫を藏し、詞翰皆古意を極む。書は隸より入手し、簡札奕々として晋人の風あり。畫は山水及枯木竹石を

善くし、會て人物を著けず。又著色せず。且多く圖章を用ゐず。故に迂癖の稱あり。好みて平遠の小景を作る。其氣韻蕭遠幽淡。眞に逸品なり。識者謂ふ。雲林の胸次、氷雪烟雲、相爲に筆端に出沒するなりと。元季の四家中に在りて、第一と稱せらる。家故より資に饒なり。一朝忽ち之を散じて親故に給施す。人怪まざるなし。未だ幾ならずして兵興り、富家悉く禍を蒙る。雲林扁舟に獨坐し、漁夫野叟と共に、蹟を五湖三泖の間に混ず。大徳五年に生れ、明の洪武七年卒す。歳七十四。江南士夫の家、雲林の畫蹟を藏すると否とに由りて、其清濁を判ち、一紙の珍、猶珠璧に等しかりき。茲に出す所の畫は、雲林が吳郡の袁寓齋、名は恭、字は仲長の爲に、作りて贈る所なること、其題識に依りて明なり。壬寅は元末至正二十二年にして、雲林六十二歳の筆とす。此畫に對して、同じく雲林が袁寓齋に與へたる手簡ありて、以て雙幅たり。元一軸の横卷たりしものなることは、陳竹賓の湘管齋寓賞編、及顧文彬の過雲樓書畫記に由りて知らる。竹賓の觀し時、右角の墨林山人の白文印、左角の陸氏子行、吳洵美の二紅文印は、既に有りしと見ゆ。會て項子京等の藏たりしことを知るべし。而して竹賓は此畫を評して、樹の出枝の處、秀勁を少き、歎書も亦生拙の趣なして、疑なくはあらずと曰へれど、竹賓と同じく之を觀たる梁山舟は、是なりと言へり。文彬の記に徵するに、此畫會て知不足齋に藏し、文彬は之を南海の伍氏より得たるなり。而して之を評して、溪山荒澗、亭榭蕭疎、虛和沖淡にして、戦はずして人を屈するの概ありと賞せり。今之を觀るに、竹賓の疑へるの非にして、文彬の賞せるが當を得たるものなること、具眼の士必や之を了せむ。世往々見る所の本、徒に勿疎なるとは、全く其選を殊にし、最も縝密なる工夫を凝らして、筆々慘憺苟もせず。遠近淡滄の勾染に至るまで、露ほども間然する所なき至妙の味は、眞に斯藝の實境を知る者の、歎服せざること能はざる神品なり。

三 明周臣山莊逸豫圖

絹本淡彩 高五尺七寸三分 潤三尺四寸八分

東京 林屋秋嶺君藏

周臣字は舜卿。東村と號す。姑蘇の人なり。畫を陳進に學びて、山水、人物を善くす。後宋人を法とし、鬚頭峻嶮、最も李唐に得る所あり。其馬遠、夏珪を學べるものは、能く戴文進と並駢す。人物に至りては、古貌奇姿、綿密蕭散、各意態を極む。唐伯虎、仇英、皆業を受く。伯虎畫名世に盛なるに及び、酬應に懶く、毎に東村を倩ひて代作せしむ。具眼に非ざれば、之を辨ずること能はずと云ふ。茲に出す所の大堂幅は、我が國に流傳せる東村遺蹟中の傑作なり。固より院體の一派に屬し、南宗文人畫には非ずと雖も、其絶精の技巧、最も他山の石と爲すに足るを以て、收めて同學の參考に資す。本圖款識、細楷姑蘇周臣の四字、右方下隅の石隙に在りて、皴筆と相混じり、寫して掲ぐるに宜しかざるが爲に、別に之を卷末に載せず。

四 清王時敏壘嶂草堂圖

紙本水墨 高四尺五分 潤一尺七寸

臺灣 林熊光君藏

王時敏字は遜之。煙客と號し、晩年又西廬老人と號す。太倉の人。文肅公錫爵の孫、嶺山先生衡の子なり。崇禎の初め、門蔭を以て、仕へて太常卿に至る。文肅公暮年孫を抱くを以て、深く之を愛し、別業に居きて、以て其好古の心を優裕す。資性穎異、儀度醜藉、儒雅風流。眞に佳公子なり。詩文を工にし、楷隸八分を善くす。畫に於いて特慧あり。尤も山水に長ず。家本收藏に富めるのみならず。名蹟に遇へば、多金を惜まずして之を購ひ、其最も法備り氣至れるもの二十四幅を擇びて、縮本を爲り、出入載せて行笥に在り。時に之を摸す。是を以て、資を取るのと甚深く、且恒に董思白、陳眉公と畫理を揚推し、終に大癡の閭奥を極め、晩年益神化の域に臻る。故に、明末に在りて、思白と共に吳梅村畫中九友の一人たり。清朝に入りては、門を杜いで出でず。専ら畫壇の冠冕、文人の領

袖と目せられ、其指授を得て、名を成せる者少からず。仍りて斯道開繼の功ありと稱せらる。萬曆二十年に生れ、

康熙十九年卒す。歳八十九。著す所書畫題跋二卷あり。其大癡に仿ふの作最も多きを徵すべし。此圖康熙五年七十

五歳にして作る所。亦大癡を法とせる佳蹟なり。其款識圖章、實大の影寫を逸したるを以て、之を後冊に載すべし。

五 王鑑泉聲松色圖

紙本水墨 高三尺三寸二分 潤一尺七寸三分

東京 山本二峯君藏

王鑑字は元照。又圓照と云ふ。湘碧と號し、又染香庵主と稱す。太倉の人。弁洲先生王世貞の孫なり。祖蔭に由りて官を得、仕へて廉州知府に至る。家藏極めて名蹟に富み、披覽年久しくして、心領神會、得る所甚だ深し。王時敏と年相若けりと雖も、之を視て子姪の行を爲し、以て互に相砥礪し、董巨に於いて、尤も深詣を得、卒に大家と成る。亦吳梅村畫中九友の一人なり。明の萬曆二十六年に生れ、清の康熙十六年に卒す。歳八十。茲に載する所の圖は、順治十八年五十四歳の作にして、布置圓渾、邱壑深遠、筆墨蒼潤、樹木蓊鬱、眞に盛名の虚しからざるを見るに堪へたり。

六 惲格菊花圖

紙本水墨 高八寸一分 潤九寸八分

東京 副島延一君藏

惲格。字壽平を以て行はる。又字を正叔と云ふ。南田と號す。又白雲外史、雲溪外史、東園客等の別號あり。武進の人なり。詩文を工にし、初め好みて山水を畫く。虞山の王石谷を見るに及び、自から材質の其右に出づること能はざるを以て、石谷に謂ひて曰はく。是の道、兄に獨歩を讓る。格妄りに天下第二手たるを耻づとて、是より山水を捨て、花卉を學び、終に沒骨寫生の法を以て、時習を一洗して生面を開く。賦色明麗、天機物趣畢く毫端に集る。石谷推重置かず。海内亦之を宗とし、目するに正派を以てす。然れども、其山水必しも石谷の下に在らず。清腴韶

秀。別に一家の妙趣あり。又兼ねて題語、書法に長ず。故に世南田を稱して三絶と謂ふ。性孝友敦篤。志を抗げて親を養ひ、古君子の風あり。知己に遇へば、或は匝月之が爲に點染し、其人に非ざれば、百金を視ること土芥の如く、一花片葉を市らず。故を以て、遊遊數十年にして、貧故の如し。居る所岷香館。唱酬皆一時の名士たり。著南田集あり。明の崇禎六年に生れ、清の康熙二十九年に卒す。歳五十八。家葬を具すること能はず。石谷之を經理せりと云ふ。茲に掲ぐる墨菊圖は、畫冊中の一頁なり。餘の七頁は、蓮花、枯木竹石、桂花、玉蘭、虞美人草、燕子花及蜡梅にして、皆設色とす。冊中の款印は、集めて卷末に載せたり。

七 梅清桃華潭圖

紙本水墨 高五尺七寸二分 闊一尺八寸

東京 菊地 惺 堂 君 藏

梅清字は遠公。一に淵公に作る。瞿山と號す。宣城の人なり。順治十一年、孝廉に擧げらる。閩閩に生長し、委儀朗秀。詩を以て江左に名あり。詠歌の餘、閒畫を作る。山水別趣ありて逸氣多く、優に妙品に入る。殊に畫松最も奇致に富み、天下第一の神品と稱せらる。著す所、梅氏詩畧十二卷あり。唐より明に迄る百八人の作を輯む。明の天啓三年生れ、康熙三十六年卒す。年七十五。本圖、其布局より樹姿山容に至るまで、奇にして而も雅ならざるなく、一家の特徴最も著きを見る。近時流傳せる梅清の作中、此畫に類する同大の寔景圖幅、一にして足らず。惟ふに聯幅か。須らく後冊出す所の西津峽圖等を參看すべし。

八 王原祁吼山勝槩圖

紙本淺絳 高三尺一寸四分 闊一尺六寸四分

東京 山本 二峯 君 藏

王原祁字は茂京。麓臺と號す。太倉の人。奉常時敏の孫なり。康熙九年進士に及第し、知縣より給事中に擢てられ、翰林に改まり、春坊に補せらる。聖祖其畫を嘉して、内廷に供奉せしめ、佩文齋書畫譜館總裁、萬壽盛典總裁に充

て、戸部侍郎に晋む。童たりし時、偶山水小幅を作りて、書齋の壁に黏す。祖奉常見て大いに之を奇とし、此子、業必ず我が右に出でむと曰ひ、與めに六法の要、古今異同の辨を講求す。南宮に尙を獲るに及び、奉常謂ひて曰はく。汝幸に進士と成る。宜く心を畫理に專にして、以て吾が學を繼ぐべしと。是に於いて筆法遂に大いに進み、黃大癡の淺絳に於いて、尤も獨絶たり。熟にして恬ならず。生にして灑ならず。淡くして厚く、實して而も清く、書卷の氣、楮墨の外に盎然たり。同時に、王石谷清麗の筆を以て、中外を傾く。麓臺乃ち高曠の品を以て之を突過す。世推して大家と爲す。虛に非ざるなり。廉州麓臺の畫を見て、煙客に謂ひて曰はく。吾等兩人、當に一頭地を讓るべきなりと。煙客曰はく。元季の四家、首とし子久を推す。其神を得たる者は董宗伯。其形を得たる者は、予敢て讓らず。形神俱に得たる者は、吾孫それ庶からむかと。廉州深く之を然りとす。以上略畫徵錄を譯して之を敘す。洵に古今の定評なり。麓臺兼ねて詩文を善くし、時に藝林の三絶と稱せらる。其襟懷高曠、稟性廉潔。生産を治めず。通籍の後、家居十年、猶蕭然として寒素の如し。明の崇禎十五年に生れ、康熙五十四年に卒す、歳七十四。著す所、麓臺題畫藁及雨窗漫筆各一卷あり。此に出す所の圖は、康熙三十三年、五十三歳の作にして、王叔明の筆意に仿ひ、吼山の勝を寫せる佳蹟なり。題識款印、載せて卷末に在り。

九 釋道濟溪山奇趣圖

紙本淺絳 高三尺九寸七分 闊一尺二寸八分

熊本 迫 靜 巖 君 藏

道濟字は石濤。清湘老人と號す。又大滌子、苦瓜和尚、晴尊者等の別號あり。明の楚藩の後なり。道行超峻。詩を工にし、書に長ず。其畫、山水蘭竹を兼ね善くす。筆意縱恣、前人の窠臼を脱盡し、天才橫溢、古今を睥睨するものなり。王麓臺嘗て云ふ。海内の畫家、固より盡く之を識ること能はず。而して大江以南、當に石濤を推して第一

と爲すべし。予と石谷と、皆未だ逮ばざる所ありと。其世に重ぜらるゝや、此の如し。晩に江淮に遊ぶ。人争ひて畫を求め、來り學ぶ者甚だ衆し。故に遺蹟最も維揚に多かりしと云ふ。本圖以てその奇逸の槩を見るべし。題語と其書と、共に亦能く人品を想見するに足る。

十 金農草庵奉佛圖

紙本淡彩 高八寸三分 潤一尺一寸六分

東京 黒澤禮吉君藏

金農字は壽門。冬心先生と號す。仁和の人。久しく維揚に僑寓す。好古力學、喜びて古詩及銘贊、雜文を作り、俱に其妙を極む。又古畫の鑒賞に精し。年五十餘にして始めて畫を事とす。初め竹を寫し、石室老人を師とし、稽留山民と號す。尋いで梅を畫き、白玉蟾を師とし、昔耶居士と號す。又馬を畫き、自から曹韓の法を得たりと謂ふ。又佛像を寫し、別號を心出家庵、粥飯僧と云ふ。其花木を布置するに、奇柯異葉、設色尤も殊なり。復塵世間の觀る所に非ず。皆意を以て之を爲る。之を問へば、則ち貝多龍窠の類なりと對ふ。著す所、冬心詩鈔あり。世に行はる。康熙二十六年に生れ、年七十餘にして卒す。此に出す所の圖は、設色、水墨、白描を雜へたる畫册十頁の一にして、以て其逸趣を賞するに堪へたり。冊中の款印、集め載せて卷末に在り。楷書の奇致亦觀るべし。

十一 方士庶松栢同春圖

紙本水墨 高三尺八寸 潤一尺一寸五分

臺灣 林熊光君藏

方士庶字は循遠。環山又小獅道人と號す。新安の籍にして、維揚に家す。詩を能くし、畫に工なり。山水、業を黃尊古に受け、用筆靈敏、氣暈駘宕。早く出藍の目あり。其作妙品と稱せられ、張宗蒼と共に一時の聞人たり。惜むらくは中壽にして夭す。本圖は乾隆十四年、元の陸廣に仿ひて畫く所。溫藉渾厚の筆墨。蓋し其人の氣韻なり。此畫誤りて款印の影寫を逸す。後册之を補ふべし。

十二 奚岡溪山素秋圖

紙本水墨 高四尺二寸 潤一尺三寸八分

東京 田邊碧堂君藏

奚岡字は純章。鐵生と號す。蝶野子、蒙泉外史、鶴渚生、散木居士等、皆其別號なり。新安の人にして、久しく杭州に寓せり。其畫山水、瀟灑清潤。筆あり、墨あり。骨法と肉氣と、二者俱に備はる。其花卉は南田の風韻あり。杭人其片紙を得て、珍とすること拱壁の如し。名海外に聞ゆ。乾隆十一年に生れ、嘉慶八年、歳五十八にして卒す。本圖は乾隆五十二年、四十二歳の作にして、勿々意に經せずして筆を驅り、自然に趣を成せる腕底の力を觀るに宜しき佳蹟なり。

十三 沈宗壽山居讀書圖

紙本水墨 高三尺七寸三分 潤一尺五寸六分

東京 内野岐亭君藏

沈宗壽字は熙遠。芥舟と號す。吳興の人なり。烏程の研山灣に居り、又研灣老圃と號す。草堂數椽。環らすに水竹を以てし、紙窓木榻、圖史羅列し、簡然隱士の廬なり。書は二王を法とし、小楷、章草、及盈丈の大字、皆之を善くせり。畫は山水人物を兼ね、刻意古に入り、功力甚だ深し。筆墨秀潤華滋、子久、思翁の間に在りと稱せられ、一時名公咸之を重ず。著す所芥舟學畫編四卷あり。世往々論畫家の作を以て、多く理路に墮つと爲し、本圖の如きも、或は其逸氣を少くを憾む者あるべしと雖も、蓋し其人品質實謹厚なるの致す所にして、固より論畫の弊に非ざるなり。

十四 日本野呂介石山中讀易圖

絹本青綠 高三尺八寸七分 潤一尺三寸

東京 高橋雄峰君藏

十五 田能村竹田竹徑步月圖

紙本水墨 高六寸一分 潤八寸七分

東京 本山竹莊君藏

十六 渡邊華山梅花寒雀圖

絹本設色 高四尺一寸 潤一尺六寸五分

東京 神戸舉一君藏



十七山本梅逸山秋景圖 紙本淺絳 高四尺一寸七分 闊一尺六寸五分

越後 眞島桂次郎君藏

以上四圖款印、後冊に載す。

十八王蒙、倪瓚、王鑑款印

十九惲格、梅清、王原祁、釋道濟款印

二十金農、奚岡、沈宗騫款印















 菊難墨菊尤難元人王冕
 軒之秀周草窗之清妍不如
 唐解元之高逸此因專師六如
 元人小異 著平  



甲戌秋 地土牙遊會
指為金邊山之楊志定
小雅出川山松年寫於京



楊志定





雙樹翠幕度布官忍草居士具善
者相合十禮佛種皆由心生絕非
摹仿所為也畫畢又題一詩三熏
三沐開經薦襄精進林中妙音長
禮畢小身辟支佛寫時指放五
藁光 心出家益僧畫記



松
同
景
天
游
生
景
意
上
品
之
美
此
作
已
有
年
矣
丁
巳
年
夏
月
畫
于
滬
上



乾隆丁未重九寫於湖上軒
吳昌碩畫



青山黛色道中行
深谷白云最是人
手搭凉棚坐看风
丁亥夏月沈子云





山中隱居
夏以高隱七月十日
畫
岳公顯水先生七景筆墨



月夜抱琴行於水竹間清尾
孤愁四面楚，送韻此際可理詩

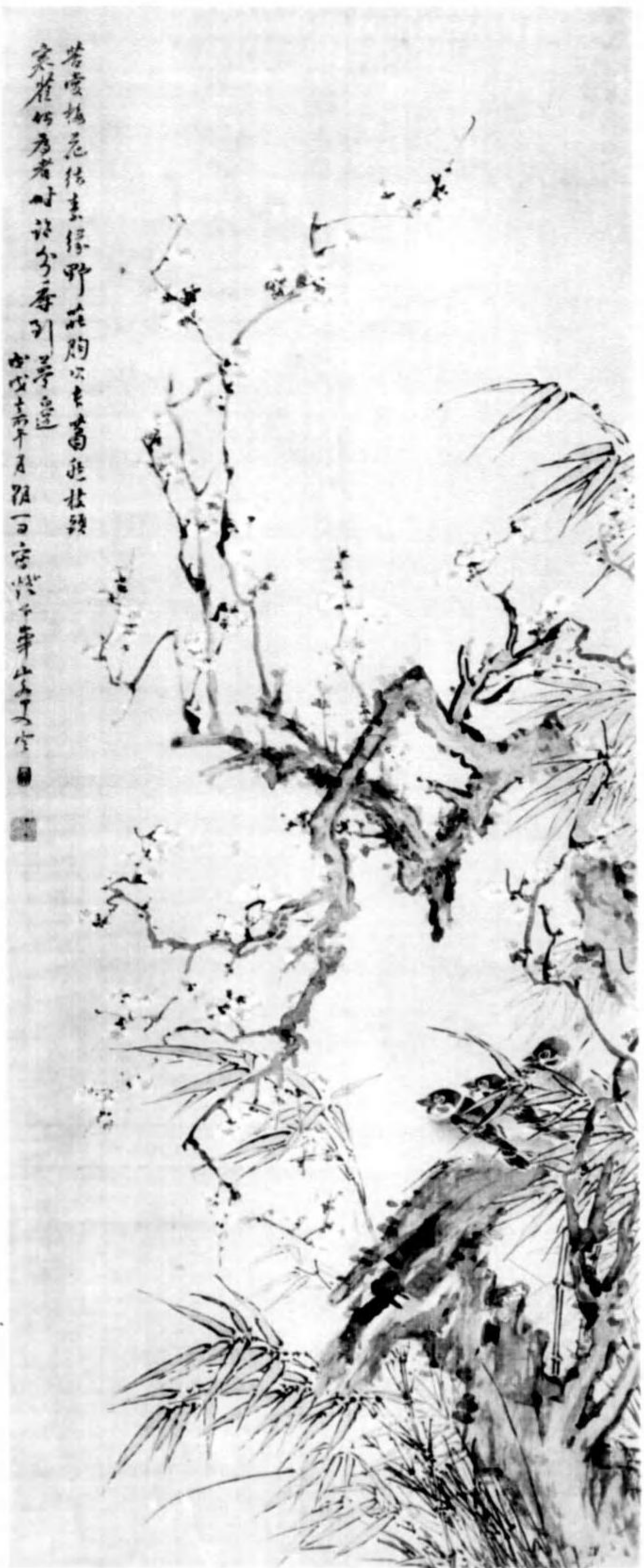
澗云半七

具遠濤

竹坡

境矣

墨印



苦愛梅花佳色野在胸中未肯
交花竹者时此分香引

丁巳年正月一日 画于北京

画



戊午秋月
王世榮
畫

五日而用
此乾隆丁丑夏
五題



松谿草堂

至正十年三月既望

黃鶴山樵王蒙



壬寅十月二日寫贈
寓齋尊文倪瓚



泉聲咽危石

日色冷青松

辛丑九秋寫似

珮宜祠元

王鑑





印款冊卉花格禪

識題圖架勝山吼部原王

甲戌秋 迪文弟遊會
 稽為余述吼山之勝余從
 未往歷用山樵筆寫其美
 麓臺祁



印款圖涼華桃清梅

梅清識

章圖水山清道釋



山僧叩門圖
昔耶居士并題



金二十六郎畫詩書



心出家金僧畫記



奚岡



印款水山岡奚

金農
畫記

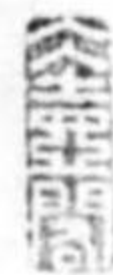


印款圖書讀居山齋宗沈

稽留山民記



金農畫冊款印



沈宗



金老
丁晚
年自
號也



大正十年七月廿三日印刷
大正十年七月廿六日發行

編輯者
發行所
著者

東京市牛込區矢來町三番地通十二號
大村西崖
東京市牛込區矢來町三番地通八號
丹青社
水上市
振替口座東京二七四七番

終

